二条城二の丸御殿白書院の復原研究

建築と障壁画の総合的検討

A STUDY ON THE ORIGINAL PLAN AND THE PANEL PAINTINGS
OF THE SHIROSYOIN OF NINOMARU PALACE OF NIJO CASTLE

西 和夫*, 小沢朝江**

Kazuo NISHI and Asae OZAWA

This is a study on the original plan and the wall paintings of the *Shirosyoin* of Ninomaru Palace of Nijo Castle. The results are as follows.

1. The Keicho plan of the *Shirosyoin* can be reconstructed. The alcove and the shelves were originally on the east of the *jodannoma*. The *jodannoma* and the *Gedannoma* were juxtaposed east and west.
2. The length of papers of wall paintings can be classified into the groups of the sliding doors and the walls in all rooms of the *Shirosyoin*.
3. Analyses of the paper size and the original plan have unveiled the fact that the panel paintings of the *Shirosyoin* were executed during the kan'ei era.

Keywords: *Ninomaru Palace of Nijo castle, Shirosyoin, Syoin style, original plan, panel paintings, length of papers*

二条城二の丸御殿、白書院、書院造、復原平面、障壁画、料紙寸法

はじめに

二条城二の丸御殿については、川上貢・平井聖両氏をはじめとする多くの研究があり¹⁾、修理工事も行われていて²⁾、すでに多くのことが明らかにされている。すなわち、慶長6年(1601)から同8年にかけて(以下これを慶長度造営と呼ぶ)徳川家康によって造営が行われ、寛永3年(1626)の後水尾天皇の行幸に備えて同元年から3年にかけて(以下これを寛永度造営と呼ぶ)徳川家光によって、慶長度の御殿の柱などを生かして新築に近い改築を行ったのが現在の御殿であることが判明し³⁾、障壁画は寛永度造営の際、狩野探幽を中心とする狩野派絵師たちによって描かれたとされている⁴⁾。

筆者もすでに、慶長度御殿の復原を行い、その成果の一端を報告した⁵⁾。

ここでは、その後判明したことと合わせ、二の丸御殿のうち白書院について、建築と障壁画の総合的検討をもとに、慶長度造営の平面等について報告する⁶⁾。

1. 建築の検討

1-1 痕跡による検討

現在の白書院の天井長押や内法長押には、かつてそこに柱または束があったことを示す埋木や釘跡が諸所にある。復原検討上の資料となる。たとえば、図3のA・Bの位置にはかつてそこに柱が立っていたことを示す痕跡があり、しかもその真上に位置する梁の下端には柱上端の柄が入る柄穴があって、ここに柱が立っていたことを裏付ける。また床下には、それと対応する位置に現在使われていない礎石が残っている(図4・6)。以上の諸点から、かつてここに柱が立っていたことが明らかとなる。復原された柱配置は床と違棚の存在を示し、現在上段の間北側にある床と違棚が西側にあったことになる。

帳台の間・四の間の2室は現在、間仕切壁で仕切られている。間仕切壁北端は柱ではなく半柱(図3のE、図9)で引違建具の途中に位置し、この建具は東半分が四の間に、西半分が帳台の間に面する中途半端な状態になっている。また、間仕切壁の4本の柱(うち2本は半柱)

* 神奈川大学工学部建築学科 教授・工博

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Kanagawa University, Dr. Eng.

** 湘北短期大学生活科学科 専任講師・工修

Lecturer, Dept. of Living Science, Shohoku College, M. Eng.

はいずれも礎石に達しておらず、大引上に立っている。2本の半柱は天井より上には延びず、残る2本の柱上部は梁まで達せず細い材で梁と繋ぐだけで、4本とも後から入れたことが明らかである。2室の格天井は、間仕切壁の真上の位置で格縁を1本抜いて2つに分けただけで(図1)、当初は3間×3間の天井だったことが明らかである。以上の諸点から、当初は帳台の間と四の間を区切る間仕切壁がなく、3間×3間の1室であったことが判明する。

上段の間と帳台の間の境に立つ柱(図3のC・D)には上段框の痕跡があり(図7・8)、この柱は位置を替えていないと判断されるため、かつてここが上段・下段の境で、現在の上段の間が当初も上段の間、現在の帳台の間・四の間(3間×3間の1室)が下段の間だったことになる。

また、上段の間の格天井には、西側に「北かわ西より二」、北側に「東かわ南より三」などの墨書があり、方位が現在と90度ずれている。2間半×3間の現在の格天井は、復原される上段の間の天井と同じ大きさで、この墨書の方位と合わせて考えれば、当初の天井を90度回転して用いたと判断される。

このように、白書院は現状とは異なる平面に復原される(詳細は後述)が、寛永行幸時の指図⁷⁾ではすでに現状の平面となっており、復原平面は寛永度造営より遡ることになる。すでに明らかにされている通り、二の丸御殿は慶長度造営建物を寛永度造営で改造したものである⁸⁾から、復原される平面は慶長度のものと考えるのが妥当である⁹⁾。

1-2 造営文書による検討

二条城の慶長度造営文書の中の、年紀も表題もない材木帳¹⁰⁾(以下、『材木帳』と呼ぶ)は、すでに川上貢氏によって慶長度の二条城のうち奥向の建物のものであることが明らかにされている¹¹⁾。また、すでに指摘されているように、慶長度の二条城には、表から順に「広間」(南殿とも呼ぶ)、「書院」(前殿とも呼ぶ)、「奥御座間」(奥ノ間とも呼ぶ)と呼ばれる建物が存在した¹²⁾。このうち、奥向きに用いられた「奥御座間」が白書院に該当するとされ¹³⁾、『言経卿記』によれば慶長8年4月1日に家康と秀忠の対面に用いられているから、遅くともこのときには存在している。また、『材木帳』の小屋材の寸法や本数は白書院の現状に合致し¹⁴⁾、また柱などの化粧材も復原平面に合致する¹⁵⁾。したがって、この『材木帳』は白書院の慶長度造営のものと考えられる¹⁶⁾。

『材木帳』には、「おなんとかまえのしきいかもい」(御納戸構の敷居、鴨居)、「おなんと玉ふち」(御納戸の玉縁)をはじめ、「よせしきい」(寄敷居)、「戸のさんかまち」(棧框)、「付柱しょうき」(定規)に使う材があ

り、慶長度の白書院に納戸構があったことを示している。また、『材木帳』に「とこかまち」とあり、慶長度に床框をもつ床があった。この床框や、「たなのとこ板」(棚の床板)、「たな板」の寸法は現在のものと一致し¹⁷⁾、寛永度に改造する際、慶長度の床框と棚板を用いたと考えられる。『材木帳』には付書院に関する記事がなく、また寛永度の材木帳¹⁸⁾に白書院の付書院の棚板に相当する材が含まれているから、付書院は寛永度に新たに作られた可能性が高い。

このほか、『材木帳』により3間長さの鴨居・敷居2ヶ所、1間長さの鴨居・敷居3ヶ所、遣戸12ヶ所などの存在が明らかとなり、建具の様相も判明する。

1-3 慶長度平面の復原

以上を総合すると、白書院は図5のように復原される。現在北側にある床と違棚は西側に位置し、床が右(北側)、違棚が左(南側)となる。現在の上段の間と帳台の間の境に上段框が入り、現在の上段の間が慶長度にも上段の間、現在の帳台の間・四の間が下段の間となって、上段・下段2室が東西方向に並ぶ平面となる。床を右、違棚を左に置く形式は、慶長10年(1605)の観智院客殿などの現存例や、寛永20年(1643)の江戸城二の丸大奥対面所¹⁹⁾や同二の丸表能舞台北の御殿²⁰⁾など文献上の例がある。この能舞台北の御殿の場合、床の右手に「御泉水」があり²¹⁾、床・棚を持つ「御上段」とそれに続く「御下段」はこの「御泉水」を見るための構成と考えられる。慶長度の白書院も北または北東に庭があった可能性が高く²²⁾、それを見るための構成ではないかと思われる。

帳台構は、先に述べた通り『材木帳』によってその存在が判明する。すでに、床・棚(上段の間西側)と上段框(同東側)の位置が決まったので、帳台構の位置は上

図1 四の間・帳台の間の境で格縁を1本抜いている状況(右側は三の間、左奥が四の間、左手前が帳台の間)

図2 現状平面図

図3 痕跡図

図4 礎石図

図5 復原平面図

東指出は壁が多く、痕跡が調査できないため、現状のままとした。また、『材木帳』により湯殿・雪隠の存在がわかるが、不明なため復原図には記入していない。

図6 床下に残る現在使われていない礎石 (南から見る。手前が図4のハ、奥がロ)

図7 上段框の痕跡 (図3のC柱)

図8 同 説明図
アミかけがC柱、その中の白く抜いた鋸形が上段框の痕跡。

段の間北側または南側となる。しかし、上段の間北側には痕跡により内法長押が廻っていたことが判明し、『材木帳』による建具の総数からそこに建具が入ることもわかるため、慶長度の帳台構は上段の間南側にあったことになる²³⁾。

2. 障壁画の検討

2-1 料紙寸法による検討

二条城二の丸御殿の障壁画は、先行研究によって寛永度造営に際して描かれたとされている²⁴⁾。しかしその根拠は主に、天明頃のものとしてされる²⁵⁾『二條御城御指図』²⁶⁾で、他に史料を欠くため造営から1世紀半も後のこの史料に頼らざるをえない実情にあるが、本当に寛永度のものか、他の根拠により確認する必要がある。その確認は、障壁画自体の検討によって行うことが望ましいが、障壁画そのものによって寛永度であることを直接、そして明確に示すのは困難である。

障壁画自体の検討はもちろん今迄も行われている。いわゆる様式論によるその検討は状況証拠としては有効だが、直接的証拠とするのは難しい。そこで本研究では、障壁画そのものによって検討する方法として、料紙の寸法を実測し、その分析を建築の復原考察と総合させる方法を採用ことにした。建具あるいは貼付壁の障壁画は、数枚の料紙を継ぎ合わせて画面としている。1枚の料紙の縦の寸法について、表面に見えている寸法と重ね合わせの寸法（糊代といってもよい）を実測し、縦軸に表面に見えている寸法、横軸に実寸法（表面に見えている寸法と重ね合わせの寸法の合計）をとってグラフを作成し検討する。料紙寸法自体は一見無味乾燥な数値に過ぎないが、この方法が建築と障壁画を検討する上に有効なことは、大仙院本堂・園城寺勧学院客殿・同光浄院客殿・名古屋城本丸御殿などをもとにすでに報告した²⁷⁾。

白書院の料紙寸法は図12のグラフの通りで、5室の障壁画は部屋毎に図様が異なるにもかかわらず、料紙寸法は部屋毎に異ならず、5室共通して、建具グループと貼付グループに分かれ²⁸⁾、さらに貼付グループは内法長押の上と下とに分かれるという特性を持つ²⁹⁾。言い換えれば、料紙は、建具は5室ともひとつのグループ、内法長押下の貼付も5室ともひとつのグループ、内法長押上の貼付も5室ともひとつのグループである。

2-2 建築との総合的検討

白書院は、先に述べた通り慶長度と判断される平面が復原され、現在の帳台の間と四の間は寛永度の改築の結果であることが判明したが、このことと障壁画料紙寸法の特性とを総合させると、障壁画が寛永度のものであることが以下に述べるように明確になる。

帳台の間の北側は幅1間だが、そこに入る建具（舞良

戸、内側は貼付）は1間半幅に2本（引違）となっている。このため内側から見て右側の建具は、1枚の建具の一部（内側から見て左側）が帳台の間に面し、残る部分（同じく右側）が四の間に面しており、その建具の内側の絵は、一部は帳台の間の図様、残る部分は四の間の図様となっている（図10・11）。ふたつの図様の境界に縦に線を引いて左と右に分け、左側に帳台の間の図様である草花、右側に四の間の図様である雪景色の樹木を描いている。境界線を引いたところは紙の継ぎ目ではなく、紙は線の左右で連続している。左右の異なる絵は、別々に描いて張り込んだのではなく、描き分けたのである。

1枚の建具の絵を描き分けたのは、言うまでもなくここに間仕切があるからである。その間仕切壁は、すでに述べた通り慶長度には存在せず、寛永度に設置された。北側の建具を慶長度のままの構成（絵を除く）としたため、中途半端な状況となった。したがって境界線で左右を描き分けた絵は、慶長度ではなく寛永度となる。また、間仕切壁両面の絵は、間仕切壁そのものが慶長度には存在しなかったのだから、寛永度のものとなる。さらに、これと図様が連続する帳台の間と四の間内側の残りの絵も、いずれも寛永度のものとなる。

先に述べたように、白書院の障壁画はこの帳台の間・四の間も含めすべて料紙寸法の特性が同じで、二条城以外の多くの調査結果³⁰⁾からみて同一時期に描かれたと判断するのが妥当である。すなわち、白書院の障壁画はすべて寛永度のものとなる。1世紀半も降る文献史料によってではなく、障壁画自体から直接、しかも明確に寛永度のものと初めて判明した。

図9 四の間・帳台の間間仕切壁北端（北入側から見る）

図11 描き分けた障壁画の詳細（左は草花、右は笹に雪）

図10 四の間・帳台の間の境、左右に描き分けた障壁画

図12 障壁画の料紙寸法

おわりに

以上、二条城二の丸御殿白書院について、建築と障壁画の両面から検討を行い、慶長度平面の復原等を行った。判明した主な点は次の通りである。

- ①白書院は、痕跡及び造営文書により慶長度の平面を復原することができる。現在上段の間北側にある床・棚は西側にあり、床が右、違棚が左となる。付書院はなく、帳台構は床・棚の左手（南側）に位置する。現在の上下段の間が慶長度にも上段の間、現在の帳台の間・四の間が下段の間で、上段の間と下段の間が東西に並ぶ構成であった。
- ②白書院の障壁画の料紙寸法は、5室とも共通して、建具グループと貼付グループに分かれ、さらに貼付グループは内法長押の上と下とに分かれる。
- ③白書院の復原平面と料紙寸法の検討結果を総合させると、白書院の障壁画はすべて寛永度のものであることが判明する。

以上の諸点は、建築と障壁画を総合させた検討から得られたものであり、この方法の有効性を明確に示している。なお、二条城二の丸御殿大広間の検討も進めており、稿を改めて報告する予定である。

〔註〕

- 1) 澤島英太郎・吉永義信『二條城』相模書房・1942年、「二条城の創建及び沿革に関する考察」『重要文化財二条城修理工事報告書第三集』恩賜元離宮二条城事務所・1958年、川上貢「二条城の規模と建築の変遷」『元離宮二條城』小学館・1974年、平井聖・斎藤英俊「二条城二の丸御殿大広間・黒書院」『日本建築史基礎資料集成十七書院Ⅱ』中央公論美術出版・1974年、西和夫「二条城の建築史——造営実態の探究」『名宝日本の美術 姫路城と二條城』小学館・1981年・改定版1991年、など。
- 2) 『重要文化財二条城修理工事報告書第1集～5集』恩賜元離宮二条城事務所・1955～76年。
- 3) 註1の報告書および川上・平井論文。
- 4) 土居次義「障壁画 二之丸御殿遠侍・白書院」註1『元離宮二條城』、武田恒夫「障壁画 二之丸御殿大広間・式台・黒書院」註1『元離宮二條城』、山根有三「円満院の障壁画」『全集日本の古寺第六巻』集英社・1985年、松木寛『御用絵師狩野派の血と力』講談社・1994年、など。
- 5) 註1西和夫「二条城の建築史」、西和夫「二条城二之丸御殿大広間の慶長創建時の平面について」日本建築学会大会学術講演梗概集・1980年、西和夫・小沢朝江「二条城二の丸御殿の研究——建築平面と障壁画の復原（上）（下）」國華第1068・1071号・1993年3月・6月、西和夫・小沢朝江・天木詠子「二条城二の丸御殿における建築

と障壁画の総合的検討——白書院・大広間の慶長度平面の復原を中心に」日本建築学会大会学術講演梗概集・1993年9月、小沢朝江「將軍の居間・白書院復原」『名城シリーズ 二条城』学研・1996年。

- 6) 本報告は、註5の既発表論文をさらに前進させたものであって、新たに判明した諸点を加えて執筆している。
- 7) 『二條御城中絵図』（中井家蔵）、『寛永行幸御城内図』（宮内庁書陵部蔵）など。
- 8) 註3に同じ。
- 9) 二条城は、慶長度と寛永度の間に、元和5年（1617）から同6年にかけて、徳川秀忠息女和子の入内に備えて造営が行われており（以下、元和度と呼ぶ）、元和度造営の可能性も考えねばならぬが、元和度造営の建物は伏見城からの移築で、しかも規模が白書院とは合致せず（註1川上論文）、元和度造営の可能性は否定される。
- 10) 京都府立総合資料館蔵。冒頭と末尾が欠けていると考えられ、どの建物のものか不明であった。
- 11) 註1川上論文。
- 12) 註11に同じ。
- 13) 註11に同じ。
- 14) 冒頭と末尾が欠けているため、本数の比較は困難だが、例えば「こや桁」（母屋および棟木に相当）は、『材木帳』では5寸角・長さ2間・53本、現状は4寸6分角・長さ2間・53本（身舎が母屋列9通りで48本、東指出が母屋列4通りで5本、計53本）で、太さは仕上げのためやや減じていると考えられるので、寸法・本数とも合致する。同様に、「さん引物」（梁に相当）は『材木帳』では末口1尺・長さ3間1尺・13本、現状では末口9寸・長さ3間1尺・13本（身舎10本、東指出3本、計13本）で合致し、また「あん桁」幅1尺7寸・厚さ8寸（現状は成1尺6寸8分・幅8寸）や「出引」1尺角・長さ3間1尺（敷桁に相当。現状は9寸角・長さ3間1尺）などの材の寸法も合致する。
- 15) 柱は、『材木帳』では7寸角・長さ2間2尺の「柱」が52本、6寸5分角・長さ2間の「とこ柱」が3本、6寸5分角・長さ2間の「たな柱、同だいわ」が2本（いずれも檜）の計57本で、一方、復原では東指出を含めると6寸3分角の柱（床柱を含む）が54本、半柱が3本の計57本で、半柱を含めれば本数は合致する。ただし、太さは仕上げのためやや減じていると考えられる。同様に、床框（『材木帳』は幅5寸・厚さ4寸・長さ2間、現状〔本文で述べるように、慶長度の材を転用〕は幅4寸8分・厚さ3寸2分・長さ2間）や「たなのとこ板」（『材木帳』は幅1尺6寸・厚さ4寸・長さ1間、現状〔同じく慶長度の材を転用〕は幅1尺5寸5分・厚さ3寸4分・長さ1間）等の寸法も合致する。
- 16) 註1論文で川上貢氏は、『材木帳』の棟束の本数が10本で、1間間隔で立つとすると桁間数は9間以上である

ため、この『材木帳』は「白書院より大きく、黒書院より小さい程度の御殿建物」のものであるとされた。しかし、この棟束をはじめ柱などの本数は、東指出を含めればよく合致する。『材木帳』に書き上げられた「ひち木」（肘木）は現在白書院の東指出部分にしかなく、東指出は慶長度にも存在したと考えられ、『材木帳』はこの東指出を含めた慶長度白書院のものと判断される。

- 17) 註15の床框と「たなのとこ板」参照。
- 18) 『二條御城御作事御材木高弘帳』京都府立総合資料館蔵。
- 19) 『二丸御絵図』内閣文庫蔵。
- 20) 註19に同じ。
- 21) 註19に同じ。
- 22) 『駿府記』によれば、慶長20年7月17日、家康は「前殿」（黒書院に相当、註1川上論文）での対面ののち、「泉水御座敷」に伝奏を召して指示を与えており、奥向の建物のいずれかの部屋が庭園に面していたことが窺われる。慶長度の白書院の周囲に「泉水」が存在したとすると、西側には床・違棚があり、東南には東指出があり、南側には後に述べるように帳台の間があるため、「泉水」は北または北東にあった可能性が高い。
- 23) 『材木帳』は納戸構の敷居・鴨居の長さを2間としており、慶長度の上段の間南側の、棚の奥行を除いた2間半と合致しない。また現在の上段の間南東隅柱西面には壁などの痕跡は見られず、帳台構左右の様相は不明だが、これ以外の史料を欠くため、ここでは2間幅の帳台構を西に寄せた状態で復原しておく。なお、白書院四の間の柱（図3のE・G）は、多数の埋木を持つことなどから転用材であることが明らかだが、帳台構と判断される痕跡があり、慶長度には帳台構両端に位置していた可能性がある。
- 24) 註4の諸論文。
- 25) 『二條御城御指図』は、本丸部分には本丸御殿の平面を描いた上に全面に貼紙をし、また二の丸部分には付箋で各部屋の画題と御殿毎の障壁画筆者を記している。本丸の貼紙は本丸が焼失した天明8年（1788）から程遠からぬ頃のものと考えられ、二の丸の付箋も同時期のものと考えられる。註4武田論文。
- 26) 宮内庁書陵部蔵。
- 27) 西和夫「大仙院本堂障壁画の料紙寸法による検討」日本建築学会関東支部研究報告・1993年、西和夫・小沢朝江・天木詠子「園城寺勸学院客殿・光浄院客殿の障壁画の料紙寸法による検討」日本建築学会関東支部研究報告・1993年、西和夫「名古屋城本丸御殿とその障壁画について——料紙寸法による総合的検討」日本建築学会大会学術講演梗概集・1993年、など。
- 28) 貼付グループ中の床（とこ）は、一部内法長押の上グループに含まれつつ、長押の上と下との中間に分布する。建具グループは、舞良戸内側の寸法がやや大きく、襖が

やや小さい傾向を見せるが、明確に分かれてはいない。

- 29) 二の丸御殿の白書院以外の料紙寸法は①大広間・式台・遠侍は、貼付も建具も、内法長押の上も下もすべて同じ寸法で、床（とこ）だけは大きい、②黒書院は、内法長押の上と下との差はなく、建具と貼付で寸法が異なる。白書院も含めて、これらの特性から二の丸御殿は(a)大広間・式台・遠侍(b)黒書院(c)白書院の3グループに分けられ、このグループ分けは寛永度の3人の造営奉行の担当の別と一致する。以上の諸点をすでに註5の國華論文で報告した。ただし、その後の検討により、すでに一部見解が異なっており、今回の報告が修正を加えた最新のものである。
- 30) 註27に同じ。

なお、障壁画の検討については、美術史の大手前女子大学教授武田恒夫・学習院大学教授千野香織両氏のご教示を得た。また、調査に当たっては、元離宮二条城事務所の宇野幸次・高橋脩二・坂井清の諸氏にお世話になった。記して感謝したい。

（1996年4月10日原稿受理，1996年6月20日採用決定）